

報 告

「脳科学若手研究会」実施報告書

東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻 竹村 浩 昌

4/4より5日の間、日本神経回路学会の助成のもと、「脳科学若手研究会」を実施致しました。「脳科学若手研究会」は学生主催による任意団体である「脳科学若手の会」のスタッフの準備のもと、若手研究者および大学院生を対象とした合宿形式の研究会として実施され、20名の参加がありました。脳研究は現代においては領域横断的な研究分野となっていることは疑いようがなく、今回の研究会では分子生物学、生化学、細胞神経科学、認知神経科学、心理学、計算論的神経科学、物理学、科学哲学など多様なバックグラウンドを持つ若手の相互の交流により、独自の視点から新たな研究分野を創造できる多様な視点を持った研究者の育成に貢献することを目的としました。

合宿初日では、参加者の自己紹介のあと、3つの班に参加者が分かれ、日経サイエンスの記事を題材としてそれぞれが独自のテーマを設定し、その問題について議論しました。その後、東京大学新領域創成科学研究科の東原和成先生による招待講演が行われました。主に東原先生のご専門である嗅覚、特にフェロモンに関する最先端の知見をご紹介していただきましたが、若手を対象にしたご講演ということで、東原先生が現在の研究テーマに至った経緯や、論文が出版されるまでの苦労や、研究に関する裏話などを交え、フランクに話していただきました。どのような専門分野を持つ参加者にとっても非常に興味深い内容で、参加者からは講演中、講演後を問わず活発に質問が出ました。初日の夜には懇親会と並行して参加者によるポスター発表が行われ、講師の東原先生、玉川大学脳科学研究所の

鮫島和行先生を交え、活発な議論が行われました。

2日目の午前、初日のワークショップの続きが行われ、班ごとに各自のテーマについて2日間議論し合った内容に関する発表が行われました。対象とされたテーマはサヴァン症候群やオキシトシンに関する日経サイエンスの記事を基にしたものが中心で、様々な分野の参加者によるそれぞれ異なった観点からの意見が提案され、それにたいして盛んな意見交換が行われました。午後には鮫島和行先生によるトークが行われ、強化学習や大脳基底核の機能に関する最新の知見に加え、理論研究者と実験研究者はそれぞれどのような立場で協力し、相互に交流していくべきかという点についても鮫島先生からのご意見をトークしていただきました。鮫島先生ご自身が理論研究から実験研究にシフトされた経緯についても語っていただき、多くの参加者にとって有意義なセミナーになったのではないかと思います。

今回の一連の合宿を通じて、それぞれの参加者が脳研究における自身の研究分野の位置づけについて再認識し、理論研究者と実験研究者が相互に協力していく必要性を体感する良い機会になったのではないかと思います。今後も定期的に学生が主体となってこのような会を開催させていただくことを通じて、分野横断的な視点を持った人材の育成に貢献することができればと思います。最後に、今回の研究会の実施にあたりまして多大なるご協力をいただきました日本神経回路学会の理事のみなさまや経理担当のみなさまに深く御礼を申し上げます。